

朝永三十郎博士略年譜

明治四年（一八七一年）

二月五日、肥前國大村在（長崎縣東彼杵郡川棚村幸石木郷）に舊大村藩士朝永甚次郎の三男として出生。父は後に學制頒布による同地初代小學校長となる。

明治十五年（一八八二年）十二歲

母、逝去す。この頃より漢字熟に通ひ始む。

明治二十年（一八八七年）十七歲

大村中學第二學年修了とともに上京、共立中學（後の開成中學）に入學。傍らエストレイキの私塾に通ひ、英語を學ぶ。

後に、東京英語學校（後の日本中學）に轉じ、三宅雪嶺、志賀重昂、齋藤淨三郎等に學ぶ。

明治二十二年（一八八九年）十九歲

九月、第一高等中學校（後の第一高等學校、當時五年制）に入學。同校地文學擔當教官内村鑑三の影響により、カライルを愛讀し、哲學に志す。父、逝去す。

明治二十八年（一八九五年）二十五歲

九月、帝國大學（三十年、東京帝國大學と改稱）文科大學に入學、哲學・哲學史（西洋哲學）を専攻。ケイベル、井上哲次郎、元良雄次郎、中島力造等の諸教授に學ぶ。長兄朝永正三（後年、京都大學工學部長）宅に偶居し、學費困難のため通學の傍ら、正則英語學校に教鞭をとる。

明治三十一年（一八九八年）二十八歲

七月、同大學を卒業。九月、眞宗大學（京都高倉、四年制専門學校）教授となり、哲學、哲學史、倫理學、心理學等を講ず。

明治三十四年（一九〇一年）三十一歲

眞宗大學が東京巢鴨に移轉するにあたり、これと行をとともに、哲學概論、哲學史を講ず。この時代、池原雅壽、石川了因等に接し、深い感銘を受く。また傍ら、東京高等師範學校において哲學史を講ず。

明治三十五年（一九〇二年）三十二歲

三月二十五日、大枝美福（よしとみ）長女秀子と結婚す。新居、東京市小石川區大塚仲町。十一月、「哲學綱要」を寶文館より出版。

明治三十六年（一九〇三年）三十三歲

一月十二日、長女しづ子生まる。

明治三十七年（一九〇四年）三十四歲

十二月、「哲學辭典」を寶文館より出版。

明治三十九年（一九〇六年）三十六歲

三月三十一日、長男振一郎生まる。

明治四十年（一九〇七年）三十七歲

二月、「哲學と人生」を隆文館より出版。七月十七日、京都

帝國大學文科大學助教(哲學・哲學史)就任。しばらく下鴨に居住し、後、岡崎美術館東に轉居す。

明治四十一年(一九〇八年)三十八歳

二月六日、次男陽二郎生まる。

明治四十二年(一九〇九年)三十九歳

九月、一人格の哲學と超人格の哲學を弘道館より出版。同月、西洋哲學史研究のため獨佛英に留學を命ぜられ、十一月六日出發、主としてハイデルベルヒ大學においてヴェインデルバントについて研究す。

大正二年(一九一三年)四十三歳

一月五日、歸朝。同月二十二日、京都帝國大學文科大學教授に任ぜられ、哲學・哲學史第四(西洋哲學史)講座を擔當す。文學博士の學位を受く。舊縁により大谷大學(眞宗大學)の昇格して京都に再歸したものに出講す。歸朝後、しばらく丸太町川端に住居し、後、通稱「聖護院御殿」境内に轉居す。

大正四年(一九一五年)四十五歳

十月二十三日、恩師ヴェインデルバント逝去す。十二月十一日、次女綾(やす)子生まる。

大正五年(一九一六年)四十六歳

一月、二近世に於ける我の哲學史を、五月、「獨逸思想とその背景」を、賣文館より出版。

大正六年(一九一七年)四十七歳

五月、ロツツエ誕生百年記念會に「ロツツエの時代」を講演し、また京都哲學會同人を代表して「ロツツエ」(賣文館刊行)

を編し、巻頭に「ロツツエの史的 position」を戴す。

大正七年(一九一八年)四十八歳

以後、主としてデカルト及びカントの研究に力を注ぎ、デカルトに關する論文數篇を「哲學研究」に發表す。

大正十一年(一九二二年)五十二歳

「カントの平和論」を改造社より出版。

大正十二年(一九二三年)五十三歳

六月、ドイツへ出張。十二月歸朝。

大正十三年(一九二四年)五十四歳

京都市左京區吉田近衛町九番地に居を定む。四月、カント生誕二百年記念會に「カント生誕二百年記念會に際して」(哲學研究)五月號所載を講演し、また、カントに關する論説を「思想」改造社「朝日新聞」等に發表す。

大正十四年(一九二五年)五十五歳

四月、長女しづ子、堀健夫に嫁す。七月、「デカルト」(哲人叢書第一篇)を岩波書店より出版。

大正十五年(昭和元年)(一九二六年)五十六歳

大正末期より昭和初期にわたり病床に親しむ。

昭和四年(一九二九年)五十九歳

三月、「第十九世紀の佛國哲學」を「文化大學講座」(王川學園出版部刊)第十四卷に發表。

昭和六年(一九三一年)六十一歳

三月二十日、京都帝國大學文學部を停年退職。四月二十五日、同大學名譽教授の名稱を受く。同月、「朝永博士還曆記念哲學

論文集(天野直樹等編)、岩波書店より出版さる。この年より大谷大學専任教授となり、傍ら東京、廣島獨文理科大学に數回にわたり出講す。

昭和七・八年(一九三二・三年)六十二・三歳

「西洋哲學史概論第二部(近世前期)」を岩波講座「哲學」中に發表。

昭和十一年(一九三六年)六十六歳

三月、「デカルト省察録」(天思想文庫)を岩波書店より出版。これより數年間、ギリシヤ哲學とくにプラトン、アリストテレス研究に力を注ぐ。

昭和十四年(一九三九年)六十九歳

六月、次女和子、關口健次に嫁ぐ。

昭和十五年(一九四〇年)七十歳

十月、長男振一郎、關口鯉吉長女領子と結婚す。

昭和十七年(一九四二年)七十二歳

十月、次男陽二郎、秋田彌之助四女美年子と結婚す。十二月、「ルソト小觀」を「大谷學報」に發表。

昭和十九年(一九四四年)七十四歳

大谷大學教授を辭す。

昭和二十年(一九四五年)七十五歳

八月十五日終戦以後は、専ら「西洋近世哲學史」の完成と「近世に於ける我的自覺史」「カントの平和論」の改訂に力を注ぐ。

昭和二十一年(一九四六年)七十六歳

四月、大谷大學の懇請により、再び出講。七月、新版「近世に於ける我的自覺史」を實文館より出版。

昭和二十二年(一九四七年)七十七歳

三月、新版「カントの平和論」を改造社より出版。老齡のため大谷大學を辭す。

昭和二十三年(一九四八年)七十八歳

七月、改訂版「近世に於ける我的自覺史」を實文館より出版。九月、學士院會員就任。十月、「哲學史的小品(ルソト・カント・ロツツエ)」を黎明書房より出版。

昭和二十四年(一九四九年)七十九歳

八月、長年にわたつて推敲せる主著の一部を「ルネッサンス及び先カントの哲學―近世哲學史第一冊」として岩波書店より出版。九月、「一般哲學史」を「哲學研究入門」(小石川書房刊行)に發表。

昭和二十五年(一九五〇年)八十歳

一月、決定版「近世に於ける我的自覺史」を實文館及び小山書店より出版。二月、増訂本「カントの平和論」を人文書林より出版。

昭和二十六年(一九五一年)

夏より、角川文庫に收めるため「カントの平和論」「哲學史的小品」の最後の改訂に従事し、前者を終へ、後者を改修中、九月十八日午後四時三十分、老衰のため自宅にて逝去す。二十二日、密葬。二十五日午後二時より、淨土真宗大谷派岡崎別院(岡崎御坊)において、本葬並びに告別式を行ふ。

院號法名、澄泉院釋信慧。享年八十歲七月。

同年十月、六月執筆の「古人劉苦光明必盛大」西田博士の書、「西田幾多郎全集」附録2に掲載さる。十二月、「吾人」追悼號。昭和二十七年四月、文庫版「近世における我の自覺史」角川書店發行。九月、「哲學研究」追悼號。

附記

この「略年譜」は、去る三月、角川文庫版「近世における我の自覺史」のために作製した「年譜」から、同店編輯部の希望もあつて一般讀者のために挿入した事項（一般史及び京大人等に関する）を削除し、新たに先生の御家族、御住居等に關する事項を増補したものである。資料は先生の著作、書簡（作者宛）、御直話並びに秀子令夫人及び御長男振一郎氏の談話其他、京大文學部三十周年史等の編纂物である。先生の「日記」其他の資料にもとづき、精確、周密な「年譜」が一日も早く完成されることを願つてやまない。

（一九五二・八・三一、 三 井）

京都哲學會公開講演會豫告

時 十一月十五日（土）午後一時半
處 京都大學文學部第八教室

發生的見地よりみたる視知覺空間の問題

京都大學助教授 岡 原 太 郎 氏

聖アウグスティヌスに於る人間論の構造

九州大學教授 長 澤 信 壽 氏